

# 顔氏家廟碑

漢字の書 楷書

とう 唐・780年 / がんしんけい 顔真卿 (709 ~ 785)

(教科書 44 ~ 47 ページ)



## 概要・特徴

中国 唐の官僚であった顔真卿が、父・顔惟貞のために廟（偉人の霊を祀った建物）を造り、その内部に建てた碑である。文・書ともに顔真卿自らが手がけた。顔真卿が72歳の作で、晩年の代表作である。碑文では、父の徳をたたえるとともに、学問と徳行で名をはせた顔氏一族の来歴を詳しく述べている。碑石の4面に3,000字近くを刻した巨大な碑であり、もとは陝西省・西安郊外の顔家の祠にあったが、現在は西安碑林博物館（陝西省）に収蔵されている。

肉太の点画や蚕頭燕尾、向勢の構えなど、顔法とよばれる独特な筆法による重厚な書風である。顔真卿の楷書碑の中でも最も個性が発揮されたものといえるだろう。

## 作者について

顔真卿 (709 ~ 785) は、唐の官僚。虞世南・欧陽詢・褚遂良とともに「唐の四大家」の一人であり、書の名手として知られる。学問に優れた名家の生まれで、幼少の頃から書を得意とした。中唐の不安定な政情下で、忠義を貫く重臣として活躍。出世と左遷を繰り返す激動の人生であったが、剛直な人間性が後世にたえられ、その書もあわせて尊重されてきた。他の楷書の作品に「多宝塔碑」「顔勤礼碑」など、行書の作品に「祭姪文稿」「祭伯文稿」「争坐位文稿」(教科書58ページ参照) などがある。



## 時代背景

顔真卿が活躍した中唐の時代は、第2代皇帝・太宗の没後1世紀以上がたち、唐王朝の統治が揺らぎはじめた不安定な世の中であった。その中で顔真卿は、「初唐の三大家」の流れをくみ、伝統書法を受け継ぎながらも、独自性を強く打ち出した豪快な書で楷書の表現に変革をもたらし、後世に大きな影響を与えた。